



## 免疫機構における熱ショックタンパク質

鵜殿 平一郎 博士

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科  
病態制御科学専攻 腫瘍制御学講座 免疫学分野

平成24年3月13日（火）午後17：00-18：30  
健康医科学イノベーション棟8階講堂

### 講演要旨

タンパク質構造の崩壊＝ストレス」と定義し、この視点から捉えた生体防御のしくみに光をあてます。分子構造の変化を感知するセンサーは熱ショックタンパク質（heat shock protein:HSP）という分子シャペロンです。

リボゾーム合成蛋白の約3%は、何らかの理由により正常な3次元構造をとれず凝集しやすい。この蛋白分子をDefective Ribosomal Products (DRiPs)と呼び、MHCクラスIIによる内在性抗原提示に関係する。また、外来性抗原は樹状細胞に貪食されファゴソーム内にしばらく留まるが、その一部は小さな孔を通して細胞質へ移行する。その際、抗原は本来の構造を維持できずヒモ状になって（DRiPs構造に近いかもしれない）孔を通過し、プロテアソームで分解されMHCクラスIIによって抗原提示される（クロスプレゼンテーション）。このようにMHC分子で抗原提示を受ける前に必ず構造の変化があり、そのためにHSPの関与が必要になると考えられます。また、最近私たちは樹状細胞膜表面HSPの存在を突きとめたので、その存在意義についても少しお話しいたします。

問い合わせ先： 免疫学・渋谷 彰 (ashibuya@md.tsukuba.ac.jp)  
TEL: 029-853-3281